

イスラームの哲学者が見たキリスト教

- M.モタッハリーの場合 -

A Muslim Philosopher's Critique of Christianity

The Case of M.Motahhari

嶋本 隆光

Takamitsu Shimamoto

キーワード

イスラーム、キリスト教、モタッハリー

KEY WORDS

Islam, Christianity, Motahhari

要約

我が国では世界三大宗教の中でイスラームは、もっともなじみが薄い。イスラームが話題になるのは、テロリズムや戦争など騒憂に関わっている場合が多い。全般的にこの宗教に対する関心は低いし、必然的に理解は低い水準にある。他方、宗教界（仏教やキリスト教など）の側からもイスラーム理解への積極的な働きかけは為されてこなかった。この現状を真摯に認めた上で、イスラームをよりよく理解するために、モタッハリーというイスラームの哲学者によるキリスト教に対する批判を概観するのが本稿の目的である。

彼の批判の重点は二つあって、一つは、キリスト教世界における聖俗の領域（ここでは宗教と科学）を分離して考える傾向、他は、キリスト教の不寛容である。後者について客観的な判断を下すことは必ずしも容易ではないし、さほど意義深いことでもないので、本稿では主に前者について紹介、検討を行う。

要するに、西洋では世界の諸現象を可知的なものと不可知的なものに分類し、科学の発達に伴って不可知的な領域が減少することで、後者を支配する宗教（神の領域）が削減され、結局無神論が横行するに至った。さらに、人類の歴史が発展段階的に進

化するという考えも批判されている。これに対し、イスラームでは、すべての現象の根源として唯一絶対の神を据えるため、あらゆる現象（存在）は多かれ少なかれ神の本質を分節化した形で保有するという立場をとる。従って、科学の発達によって宗教が衰退するということはないし、逆に、現実的に、しかもあらゆる角度から対象を眺める立場が貫かれる。これが「イスラーム的世界観」であるというのである。

SUMMARY

The September 11 attacks have temporarily drawn world-wide attention to Islam. The fact is, however, that there is still much misunderstanding of Islam and little sincere concern about it. This article presents the case of one Iranian Muslim philosopher's critique of Christianity and Christian society in the West, which has brought about materialism and atheism in the modern Western world. Motahhari's concern, to be sure, is not merely criticism of Christianity, but of the Western (Christian) way of speculation in general, that is, dividing the world into two clear-cut spheres, known and unknown, or scientific and mystical, which in his view has materialized in the final triumph of materialism (atheism) over theism.

はじめに

キリスト教徒は、イスラーム教徒によれば「経典の民(ahl al-kitāb)」である。すなわち、同一の天上にある石板に記された神の言葉を預言者を通じて頂戴した、いわば兄弟のようなものである。両宗教は歴史上対立し、敵対関係にあった時代があったが、対立の原因は教義上の相違に起因するものでは必ずしもなかった。

昨年起こった米国同時多発テロの後、米国大統領はテロリストに対する戦争を十字軍にたとえた。これがキリスト教徒対イスラーム教徒の戦いという意味で使われたのであれば、全く根拠のないレトリックであり、人騒がせもはなはだしい。それとも、意図されたのは、無法なテロリストに対する「民主主義」陣営からの「聖なる」使命を帯びた戦いという程度の独りよがりの意味合いであったのだろうか。いずれにせよ、十字軍などという言葉が軽率に使われたことは、イスラーム教徒にとって迷惑千万この上ないことであつたらう。

実は、このような米国をはじめとする西洋諸国の対応には、全般的なイスラームに対する無理解や偏見があった。例えば、20年以上も前、イラン・イスラーム革命が起こった時も、当時世界で最も進んだ諜報機関をもつ米国にさえこの革命の発生は予期され

ていなかった。逆に、イランは当時中東で最も安定したアメリカの同盟国と考えられていたのである。多くは欧米諸国のイスラームに対する無理解と誤解に起因していた。

一方、わが国でもこうした無理解や誤解を解消するために、イスラーム研究者は努力を払ってきたが、イスラームに対する理解が高い水準にあるとはとうてい言い難い状況にある。また、仏教徒やキリスト者の側による主体的なイスラーム理解への努力についても寡聞にしてあまり話題になったことを知らない。

この現状を踏まえた上で、本稿では M.モタッハリー (1919 - 79)¹ という、イスラーム教シーア派の哲学者によるキリスト教理解、批判を紹介、検討したい。同時に、この人物が、自ら帰依する宗教をどのようなものと考えているのか、彼の理解するキリスト教との比較によって提示してみたい。また、モタッハリーの批判内容を一層よく理解するために、西洋の思想家によるのキリスト教批判なども援用しながら、批判の内容を分析、検討したいと思う。

この作業は、無論キリスト教の欠点を明らかにすることを意図しているのではない。そうではなく、異文化、異宗教をより客観的に知るために、興味深い事例を提示することが主要な目的である。わが国であまり知られていないイスラームの思想家が、いわば兄弟の関係にあるキリスト教、特に 19 世紀から現代にいたる時期のキリスト教とその社会をどのように理解していたか、一つの事例を紹介する試みにすぎない。

前提 - ムハンマドとキリスト教、初期のイスラームとキリスト教

本論に入る前に、若干の前提的解説が必要であろう。そこでまず、イスラームの開祖ムハンマド (570 ? - 632) とキリスト教、ならびに初期のイスラームとキリスト教の関係について簡潔に述べてみよう。²

イスラームはユダヤ教やキリスト教の影響の下に誕生した宗教(価値の体系)であることはよく知られている。教義や儀礼面でユダヤ教の影響が顕著であるが、622 年にメディナに移住 (ヒジュラ) して後、両者の関係はかなり悪化した。メッカ入城 (630 年) に典型的に見られるように、アラビア半島を新宗教の支配下に置く過程において平和的手段を上策としたムハンマドではあったが、ユダヤ人の一部族に対して相当に苛酷な手段に訴えたことがあった。

一方、キリスト教について、ムハンマドは身内にキリスト教徒がいたものの (妻ハディースの従兄弟、ワラカ) 彼のキリスト教徒との本格的な関わりは、やはりヒジュラ以降のことであって、生涯の終わりに近い頃であった。したがって、彼のキリスト教に関する知識は限られていた。たとえば、ムハンマドの新約聖書 (injīr) につ

いての知識は、さほど深いものではなかったといわれている。

しばしば指摘されるように、預言者として召命を受ける以前、ムハンマドはシリア方面へ交易の旅に赴いた際に接触したキリスト教徒から影響を受けた。特に、キリスト教の修道士や隠遁生活者の禁欲的勤行が彼に何らかの示唆を与えた点は疑いない。しかし、メディナに移ってからのムハンマドは、宗教者として、かつ政治家としての地歩を固めていたので、もはやユダヤ教にもキリスト教にも追随しない「まん中の民族」として自ら創唱した宗教を認識するようになった。したがって、例えば礼拝の方向（キブラ）やラマダーン月の断食の日数など、最初はユダヤ教の慣習に習うことが多かったが、やがて独自の儀礼として確立された。

ところで、キリスト教徒との関係であるが、全般的にイスラーム教徒の共同体とキリスト教徒の関係は友好的であった。キリスト教徒はナサレ人（nasārā）と呼ばれた。両者のこの関係が明瞭に表されているのは、コーラン第5章、「食卓」85節である。³

お前（ムハンマド）もきっと気がつくだろうが、信仰者に対していちばんひどい敵意を抱いているのはユダヤ人と、それから多神教徒。またこれもすぐに気がつくだろうが、信仰者に対していちばん親愛の気持ちを抱いているのは、「我々はナザレ人」〔ナサーラー〕と自称する人々（キリスト教とのこと）。それというのは、彼らの中には司祭とか修道士とかいう者が沢山あって、みだりに傲慢な心を起こしたりしないからだ。

しかし、キリスト教との良好な関係も永続しなかった。なぜなら、キリスト教徒にとって、イスラーム信仰の基本中の基本、(1) 唯一神アッラーに対する帰依、(2) ムハンマドがアッラーの使徒であると認めること（この2点は、イスラームの信仰告白の最重要点である）は、とうてい承服することができなかったからである。

ムハンマドの新約聖書についての知識が不十分であることはすでに記した。しかし、彼のキリスト教徒に関する知識が彼らとの接触を通じて増大するに従い、教義上の相違が明らかになってきた。

また「我々は、ナサーラー（ナザレびと、キリスト教）じゃ」と自称する者どもとも我らは契約をむすんだが、彼らは（神から）教えて戴いたものの一部をすっかり忘れてしまったので、我らは彼らの間に敵意と憎悪をかき立てた。復活のその日までも続く憎しみを。（第5章、「食卓」17節。）⁴

これ、汝ら、信徒の者、ユダヤ人やキリスト教徒を仲間にするではないぞ。彼らは

お互い同士だけが親しい仲間。汝らの中で彼らと仲良くするものがあれば、その者もやはり彼らの一味。悪いことばかりしているあの徒をアッラーが導いたりし給うものか。(第5章、「食卓」56節。)⁵

特に問題になった点に、イエスの誕生と死、さらに三位一体の教義があった。少し長いが要点が明瞭に示されているので、該当箇所を引用してみる。

「神はすなわちマルヤムの子救世主である」などと言う者は無信の徒。(この倒置法による表現が何らかの意味をもっているのかどうか、なんともいえない。)メシアが自ら(つぎのように)断言しておるのではないか、「これイスラエルの子ら、わが主にして汝らの主なるアッラーに仕えまつれ。まことにアッラーとならべて他の何者でも崇めるような者には、アッラーが樂園を禁断の地となし給う。落ち行く先は(地獄の)劫火。(これはメシアが断言したにちがいないと、ムハンマドが考えている、かれ自身の意見にすぎない。)……「まことに、神こそは三の第三(三位一体の中の一つということ)」などという者は無信の徒。神というからにはただ独りの神しかありはせぬはず。あのようなことを言うのをやめないと、無信の徒は、やがて苦しい天罰を蒙ろうぞ。……マルヤムの子救世主はただの使徒にすぎぬ(キリストの神性を否定している)。彼以前にも使徒は何人も出た。また彼の母もただの正直な女であったに過ぎぬ。二人ともものを食う(ふつうの人間)であった。見よ(ムハンマドに対する呼びかけ) こうして色々と神兆を説明してやっても、よく見るがよい、彼らはああして背いていく。(第5章「食卓」76 - 79節。)⁶

さらに、ムハンマドはキリスト教徒が啓示された内容を忠実に伝えず、隠蔽したことに対する非難を行っている。例えば、キリスト教徒はイエスが自分の後にアフマドという一人の使徒(つまり、ムハンマド)が現れると述べたことを隠してしまったというのである。

このように、イスラームとキリスト教の関係は対立の様相を示し始めていた。しかしながら、現実にはイスラームがアラビア半島から外部へと拡大してゆく7世紀から8世紀初において、イスラーム教徒の「経典の民」に対する対応の仕方は決して苛酷なものではなく、寛容なものであった。これはイスラームそのものの性質によると同時に、先進的な先住民族に対してイスラーム教徒が社会制度、行政制度、税制などの領域で追従せざるを得ないという現実の要請があったためである。一般に先住民族は、人頭税(ジズヤ)を支払えば、旧来の宗教の信者であり続けることができた。「右手にコーラン、左手に剣」という有名な表現は、実際のイスラーム初期の歴史とは合致しない点を知る必要がある。

異民族、異文化、異宗教に属する人々を多数内に含む緩やかなイスラーム共同体の理念は、アッパース王朝（750 - 1258）やオスマン帝国（1299 - 1922）に継承された。そこには、雑多な文化、民族、宗教、言語的要素が互いの存在を認め合いながら共存する世界の理念があった。⁷

モタッハリーの見るキリスト教

以上を踏まえて、具体的な検討に入ろう。モタッハリーは、現代西欧世界が唯物主義（無神論）へと向かう原因を考察する過程で⁸、教会（kelīṣā）が重要な役割を担ったという。そこには2つの原因があり、一つは神の性質（神性）ならびに形而上学の意味を誤解していること、第二は、人々（特に、知識人、自由主義思想家）に対する苛酷な対応、すなわち不寛容であった。以下、この二点についてモタッハリーの議論に従いながら解説を進める。

モタッハリーは、『神の存在証明（ethbāt-e vojūd-e khodā）』ならびに『自然の中の神（khodā dar tabī'at）』という西洋の研究者による書物に基づき、以下のように説明している。

中世以来、キリスト教会では神の問題が聖職者（kashīsh-hā）の手に委ねられてきた結果、神に関して子供じみた誤解を生み出した。心ある人々はこれを不快に感じ、結局、有神的な立場（maktab-e elāhī）に反抗するに至った。彼らの誤りは、まず神を人間のイメージで理解し、説明するため、子供の頃から教会の宗教的影響の下で育った人たちは、やがてその問題は科学的（'elmi）に、また理性的に見て、真実と合致しないと考えるようになった。⁹ 他方、人々は形而上学（māverā'-ye tabī'at）の問題には理性的な（ma'qulī）理解の方法があり、教会が過誤を犯したと考えることはできなかったが、いったん教会の解釈が科学的尺度に合致しないことを知るようになると、神の問題そのものを否定するようになったという。

この一連の問題はキリスト教世界に属する事項であるとはいえ、イスラーム世界ではヨーロッパ世界の影響が大であり、多くのことを模倣してきたことも事実である。そして、イスラーム世界で生じている現実の問題の多くは、ここ（すなわち、近代西洋との接触）から生じた。しかし、イスラーム世界には哲学と神智学者の間に独自の一派があったため、ヨーロッパとは異なった結論に到達したのである、という（後述）。

西洋人の唯物主義にいたる理由を理解する一助として、モタッハリーはA.コントを実例にとって説明を続ける。¹⁰ 無論、コントは聖職者ではなく、キリスト教会の立場を直接代弁する人物ではない。しかしながら、決して彼自身教会の束縛から自由であ

ったのではないし、しかも、彼の思想には時代（科学の時代）が強く反映されているため、モタッハリーにとって自らの所論を説明するのに便利であったのであろう。

さて、コントによれば、科学は自然の父（=神）を本来の職から遠ざけ、神の一時的な業に謝意を表しながらも、神の偉大さを末端へと導いてしまった。つまり、科学の発達によって新規にさまざまな事実が発見されることによって、これまで神の作用によって生じると考えられていたことが実はそうではなく、他の原因によることが明らかになった。その結果、神の力は逐次弱められていった、というのである。¹¹

コントによる神を「自然の父」と理解するやり方は、彼なりのキリスト教会的思惟方法を示すものである。彼の考え方は、確かに教会のものとは異なっている。しかし、彼の神に関する思想は教会的思想であったし、思惟方法に関しては教会的発想から自由であることはできなかった。モタッハリーは続ける。コントによれば、神は世界の一部であり、世界のさまざまな要因（‘avāmel）の中の一要因であるが、それは不可解（majhūl）、神秘的な要因である。他方、世界の現象（padīdeh-hā）には二種類あって、それは可知的なもの（ma’lūm）と不可知的なもの（majhūl）である。世界にある不可知的なものは、あの神秘的なものと関係を保っているが、科学の影響の下で不可知であったものは漸次減少してゆく。モタッハリーによれば、このような考え方は、単にコント独自のものというより、彼の時代の反映であった。¹²

このように世界を二分法的に分解することには重大な誤りがあるという。すなわち、この考えに従うと、神（神の聖なる性質）は被造物の中の一部に過ぎなくなるし、世界に存在するさまざまな作業の中から神にも仕事を与え、いわば分業を行うことになる。そのような場合、神に割り当てられた仕事はどのようなものなのであろうか。このような状況では、因果の関係が非常に不明瞭なものとなる。その結果、我々は神を自分たちにとって未知なる分野にのみ求めることになる。やがて、既知の分野が増大し、未知の分野が減少するにつれて、我々の信仰（神学、khodā shenāsī）の領域は限定されてしまう。そして拳句の果て、すべてが知られるようになると、信仰（神学）の領域は跡形も残らなくなる。¹³

この考えによれば、世界に存在するもののほんの一部が神の徴であって、しかもそれらの中で原因が未知のものだけに限定されるということである。そして既知となった被造物は、神の因果及び神の本質的徴の埒外に出てしまうことになる。モタッハリーは、以上の考え方がどれほど誤っているかを対照的に示すために、イスラーム神学（哲学）の基本的前提を次のように要約している。¹⁴

彼はすべての世界の神であって、すべてのものに対して等しい関係を持っている。
すべての者は例外なく彼の力と知識、智慧、意志の顕現であり、彼の完全さ、美しさ、

栄光の徴である。既知と未知の区別はこの世界にはない。世界は神の秩序と因果を持ち、一つどころで彼の本質を軸とする。彼は時と場所に先行するのである。……

このように、イスラーム哲学では神の本質と存在の先行性について、まず神の存在が先行するという立場を堅持する。そうでなければ、存在する神の唯一性 (tawhīd) というイスラーム神学 (哲学) の大前提が揺らぐからである。さらに、上記引用からも窺えるように、すべて世界に存在するものは最初の存在、第一原因たる神より出発して、存在の縦の秩序を純度の高いところから低いところへと下降する。そしてそれぞれの存在の位階において、神の存在と性質を分節化した形で共有するので、あらゆる被造物は程度の差こそあれ、神と性質を分有することになる。このような世界観に聖と俗、物質と精神の分限は認めがたく、両者は不即不離の関係で結びついていることになる。¹⁵

モタッハリーは言う。イスラーム神学 (哲学) において、神と自然に関する諸々の原因に不明瞭な点はないのであって、すべて自然界にあるものは初めから終わりまで単一の作業であり、すべては全体として神の業である。一部分は神が為し、他は自然の為せる業であるという分業的な考え方ではないのである。

モタッハリーはさらに、コントの有名な人類の思想発展に関する三段階の法則、(1) 神学 (宗教) の時代、(2) 形而上学 (哲学) の時代、(3) 実証主義 (科学) の時代について触れ、このような分類の誤りを指摘している。まず、もし人類の思想の時代的区分をしたいのであるならば、人類における知識人 (mofakkerān) の考え (一般の人々ではない) をさまざまな時代の基準 (meqiyās) として定め、人類の中の際立った (bar josteh) 人々の世界観を考慮しなければならない。しかし、各時代の思想家はそれぞれの時代の代表であったとはいえ、人類の思想がこのような三つの段階を必ず経てきたとは決していえない、という。¹⁶

つまり、モタッハリーによれば、この三つの段階は人類が順次発展的に経過するものではなく、単独の人間が思考の方法として同時に併せ持っているものである。それは同時に神的であり、哲学的であり、科学的なのである。

モタッハリーはこのような立場をイスラーム的世界観 (jahān binī) と呼ぶが、この点については『イスラーム的世界観序説 Moqaddameh-ye Jahānbinī-ye Islām』¹⁷ の中で詳細に論じている。本稿では十分に論じることができないが、要点は次の通りである。

彼によれば、世界観には大きく分けて三つある。一は唯物論的世界観 (マルクス主義を想定している)、第二は観念論的世界観、そして最後に現実主義的世界観である。第一は、物質に最大の価値をおき、魂を軽視するのに対し、第二の立場では、人間が物質に執着することから分裂や不和が生じることを鑑みて、人間の道徳的、社会的統

合は精神的な教育、訓練の問題であるとする立場である。¹⁸

モタッハリーによれば、人間が分裂する原因を物質のみに求めたり、道徳的、社会的な人格が経済や生産関係に従属するという考えは正しくないという。これに対してイスラームの立場は、現実主義的である。つまり、人間は純粹に物質主義的存在でも、精神的存在でもなく、この世界での生活と来世での生活は密接に結びついており、肉体と精神は相互に関係を有している。イスラームは現実的に(vāqe' negar)あらゆる角度から対象を眺めながら(hameh-ye jānebehbīnī)、精神的、道徳的改革と同時に社会的差別との戦いを進めてゆく。具体的には、信仰と礼拝を助けとして心理的な分裂と戦い、他方、差別、不正、略奪、抑圧、偽りの神々に対して戦いを行うのである。¹⁹

この現実主義的立場には、すでに「前提」で少し触れたような、初期イスラーム成立の状況との類似点がある。すなわち、セム系の三大宗教の中でイスラームは最後発であり、先行する諸宗教の利点欠点を有効に取捨選択できる立場にあった。その選択、解釈が納得行く形で行われたかどうかはともかく、少なくともそのような位置にあったことは事実である。¹⁹ 19世紀以降の西洋哲学思想を極力均衡を保ったまま取り入れようとしている。いずれにせよ、モタッハリーは、イスラームは一方の極端に偏らず、他の宗教思想の欠点を克服した均整のとれた価値の体系であると主張しているのである。

キリスト教の不寛容

キリスト教会には神(神の性質)の理解において誤解があるという指摘と同時に、モタッハリーが提示するキリスト教会のもう一つの問題点は、異端に対する不寛容な態度である。この性格によって、人々は教会を離れ、神に敵対するようになった、という。特に自由主義的立場に対して否定的な態度をとったが、この点を(1)思想的傾向、(2)聖職者組織の二点から説明を行っている。²⁰

モタッハリーによると、キリスト教会は世界に対して人間に関する知識の原理を提示した。その際、キリスト教の特別な信念に依拠して、ギリシア哲学やそれ以外の哲学を援用しながらそれを形成した。そして、出来上がった公式教義('olūm-e rasamī)に対立するものを容認しなかった。そればかりか、敵対者に戦いを挑んできたのである。宗教上の自由の問題に関して、宗教の基本原則(osūl-e dīn)は、模倣(taqlīd)や強制(tahmīl)ではなく、探求でなくてはならない。これに反して、キリスト教(masīhiyat)では、宗教の原則として理性('aql)を「禁止領域(manteqeh-ye mamnū'eh)」と宣言してきた、という。²¹

キリスト教会が犯した主要な過ちは、過去の哲学者から遺産として受け継がれた人

類の信念のほんの一部、ならびにキリスト教神学者の知識を宗教の原則として容認し、これに敵対するものを背教者 (ertedād) と見なしてきたことである。さらにこれだけで満足せず、調査を行って背教が明らかになった者をキリスト教共同体から追放した。異端狩りを行い、徹にいき細を穿ち異端的兆候を探ることによって、個人または集団に対しても大目にみることにはなかった。その結果、知識人たちは恐れをなし、教会の正しいと見なす事柄に反対する勇気を持たなかった。中世期以来のこのような反動的雰囲気に対する反抗の機運が、19世紀に入り当然のこのように発生するようになった、というのである。²²

モタッハリーは以上の分析を証明するべく、中世から近代にいたるまでに行われた宗教裁判、魔女狩り、宗教戦争などの事例を列挙しているが、その推進者は聖職者であった。それらについていちいち紹介する必要はないと思う。けだし、イスラーム世界においても類似の現象はあった。いずれが苛酷であったか議論してもあまり生産的ではないであろう。

とまれ、モタッハリーは続ける。本来愛によって導くはずの宗教が、ヨーロッパでは神や宗教に対してかえって辛く当ることになり、結局宗教の基本に対して反逆するようになった。すなわち、神は存在しないと考えるようになったというのである。また、宗教の指導者たちは、豹の皮を身にまとい、とらの牙を持って異端に対応した。²³ このような状況に至ったとき、宗教に対するもっとも強烈な打撃が唯物主義(無神論)の利益となるのである。

以上の議論は決して単なるキリスト教批判、ヨーロッパ文明批判と捉えられてはならないと思う。実は、モタッハリーがこの問題を考究していた時期(1960-70年代初期)のイラン社会は、西洋文明の奔流に曝され、無神論、唯物思想が猛威を振るっていた。イランは思想的に混乱の極地にあった。一方、宗教学者たち(ウラマーという。イスラームは聖職者を認めない。)は有力な指導者を欠き、組織上の混乱が見られた。したがって、キリスト教社会の問題をいわば反面教師として、自らの所属する社会の立て直し、問題解決を模索する手段として利用する意図があった、と考えるべきであろう。

おわりに

本稿で紹介したモタッハリーのキリスト教批判は、短編で体系的ではないし、その正当性についても議論の余地が多々ある。「はじめに」でも記したように、イスラームとキリスト教の優劣を問題にすることは筆者の念頭には全くない。むしろそのように鼎の軽重を問うことは、百害あって一利もないであろう。

重要な点は、世界三大宗教の一つとされるイスラームを信奉する一思想家が、キリスト教をどのように理解していたのか、その一端を知ることである。モタッハリーは

決して度を越えた教条的で狂信的人物ではない。政治に対しても一定の距離を保っていた。イスラーム（特にシーア派）の基礎教義に通暁していることは言うまでもなく、西洋哲学にも造詣が深かった。彼の多数の著作から知れることは、イスラーム擁護の線は崩し難いとしても、現代イスラーム世界が抱える諸問題に対してできるだけ柔軟に解答を見出そうとしているように見える点である。

彼の議論の前半、現実主義的姿勢は多くの示唆に富んでいる。あらゆる角度から現実の問題を眺めることによって、さまざまな価値の相対化が実現され、共通の理解に到達する糸口になるかもしれない。

他方、議論の後半、つまりキリスト教の不寛容については、さまざまな異論があろう。イスラームの歴史においても異端問題はあったし、必ずしも一貫して寛容な態度が貫かれていたとは言い難いからである。

繰り返しになるが、筆者の意図は両宗教のいずれがより寛容であったとか優れているとか判断することではない。そうではなく、真の宗教が必要不可欠なものとして求められている現代において、より均衡のとれた宗教理解に達する一助としたい、この一点に尽きる。

注

- 1 モルタザー・モタッハリーは、1919年イラン北東部の町ファリーマーンに生まれた。初期の教育を生まれ故郷で受けたあと、13歳のときシーア派最高学府コム（テヘランの南部150キロに位置する）に赴いた。モタッハリーの思想形成を知るうえで彼が師事した人物を考察することが肝要である。彼の師の中で最も重要な人物は、ホメイニーとタバータバーイー(Sayyid Mohammad Hosein-e Taba'taba'i)である。前者は1979年の革命の指導者であり、革命の基本原則を提示した人物である。講義集『イスラーム政府(hokumat-e Islami)』が有名である。モタッハリーはホメイニーから法学原理(osul-e fiqh) 哲学及び倫理学(akhlaq)を学んだ。一方、タバータバーイーは著名な哲学者であり、コーランの解釈学者であった。特に理性的学問に優れ、唯物論哲学の批判者であった。モタッハリーは哲学(理性的学問)の学習を23歳頃から開始しており、29歳のときに、コム町に来て数年を経たタバータバーイーからイスラーム最大の哲学者の一人、イブン・シーナーの哲学を学んでいる。モタッハリーは25歳頃から主にイラン共産党(ツード党)の出版した唯物論に関する書物を多く読んだ。唯物論哲学は、その当時誰も真剣に取り組んでいなかったとはいえ、やがて国王モハンマド・レザー・パフラヴィーの圧制による国情不安の中、イラン人青年層の間で少なからぬ影響力を持つようになる。しかし、モタッハリーは、後年唯物論哲学とは哲学を知らぬ者の哲学であることが分かったと回顧している。1952年、モタッハリーは首都テヘランを離れた。このこと

の意義は大きい。それまで宗教学者の共同体を中心に活動していたのが、大学その他の施設で学生をはじめ、一般の人々とも接触するようになった。彼は旺盛な執筆活動や講演活動を通じて、一般ムスリムの啓蒙活動に一役買った。常にホメイニーと連絡を保っていたが、革命成就後、師のスポークスマン、理論の解説者としての役割を果たしていた。しかし、1979年5月、彼の活動に敵意をもつフォルカーンというグループによって暗殺された。

- 2 イスラームの初期の歴史に関して、いくつかの優れた書物がある。本稿の準備に際しては、ベル (Richard Bell) 『イスラームの起源』、熊田亨訳、筑摩叢書、を頻繁に用いた。さらに、W.Montgomery Watt, Muhammad' Prophet and Statesman, Oxford University Press, 1961 が古典的名著として知られる。なお、本書には邦語訳、『ムハンマド〔マホメット〕 - 預言者と政治家』、牧野信也、久保儀明訳、みすず書房、1970がある。その他、邦語文献としては、嶋田襄平、『預言者マホメット』、角川新書、昭和41年、ならびに『世界宗教思想叢書5、イスラーム教史』山川出版社、1981年、などが利用しやすく、しかも信頼できる。
- 3 本稿では、コーランの引用はすべて井筒俊彦、『コーラン』上中下、岩波文庫、1957年を用いた。同書上、161-162ページ。
- 4 上掲書、147-148ページ。
- 5 上掲書、155-156ページ。
- 6 上掲書、160ページ。
- 7 例えば、鈴木董、『バクス・イスラミカの世紀』、講談社現代新書、1993、などが利用しやすい。
- 8 Motahhari, 'Ellal-e Gerayesh beh Madegeri,1978,' Naresa-ye Mofahim-e Dini-ye Kolisa", pp.40-51.
- 9 Ibid.,p.41. 幼年期における教会の影響について、ラッセルは次のように述べている。What really moves people to believe in God is not any intellectual argument at all. Most people believe in God because they have been taught from early infancy to do it, and that is the main reason. Bertrand Russell, *Why I am not a Christian*. P.20, London, 1996.
- 10 Motahhari,op.cit., p.43.
- 11 Ibid.,43.
- 12 Ibid.,p.44. 神秘的領域と科学的に明晰な世界の対立関係については、Russell, *Mysticism and Logic*, London,1994,が示唆に富んでいる。さらに、コントの思想におけるキリスト教の影響については、Karl Löwith, *Meaning in History*, London,1949、から多くの示唆を得た。本書は大多数の主要な西洋思想の背後に、発展史観と終末論の世界観があることを指摘し、そこにキリスト教的世界観を認めている。コントの思想もその一例として扱われていることは言うまでもない。この意味で、モタハリーのコントの扱いは必ずしも外的外れではないことが分かる。
- 13 Motahhari, Ibid., p.44.
- 14 Ibid.,p.45. 現世における神の秩序ならびに因果の関係については、拙稿、「神の公正 ('adl-e elahi) の現代史的意義 M.モタハリー (1919 - 79) の神義論」、『大阪外国語大学論集』第23号 (2000)

および「モルタザー・モタッハリーの近代西洋唯物主義（無神論）批判 B,ラッセル批判を中心に」
『大阪外国語大学言語社会学会誌 EX ORIENTE』vol.5, 2001、の中で詳細に論じた。

15 Motahhari, Naresa, p.45.

16 Ibid.,p.47.

17 Moqaddameh-ye Jahanbini-ye Islami, Qom., n.d., pp.61-137,でモタッハリーは詳しくこの立場を解説している。さらに、大著 *Osul-e Falsafah*,のかなりの部分が現実主義の哲学の意味の解説に用いられている。現実的にあらゆる角度から対象を眺める立場は、彼の哲学の根幹であったことが分かる。

18 Russell, "Religion and Churches", in *Russell on Religion*, London,1999. を参照。

19 Motahhari, Moqaddameh-ye Jahanbini-ye Islami,p.97.

20 Motahhari, "Naresa", pp.47-48.

21 シア派イスラームにおいて理性は格別の意味を持っている。スンナ派では、10世紀に法解釈において理性を用いることが原則として禁止された。しかし、シア派では18世紀末から19世紀のはじめにかけて法解釈に刷新が見られ、きわめて重要な役割を果たすことになった。シア派では、理性を宗教の原則の一つに数える。法解釈において理性を行使することをイジュティハードというが、この原則に封印がなされていなかったため、近代現代のイラン史において法学者を代表とするウラマーが新しい世界情勢の変化に比較的柔軟に対応できる条件が整っていたといえることができる。シア派の特徴については、拙稿、「シア派小史 誕生からイスラーム革命まで」『イスラームの祭り』G.von グルーネバウム、伊吹、嶋本訳、法政大学出版局、2002、を参照された。さらに、M.Motahhari, "Asl-e Ijtihad dar Islam", *Dah Gofar*, pp.63-85, において詳しい説明がなされている。

22 Motahhari, Naresa, p/48-51.

23 Russell, "Religion and Churches", *Russell on Religion*, p.154 で、ラッセルは聖職者の立場について次のように述べている。

The clerical profession suffers from two causes, one of which it shares with some other professions, while the other is peculiar to itself. The cause peculiar to it is the convention that clergymen are more virtuous than other men. Any average selection of mankind, set apart and told that it excels the rest in virtue, must tend to sink below the average. This is an ancient commonplace in regard to princes and those who used to be called 'the great'. But it is no less true as regards those of the clergy who are not genuinely and by nature as much better than the average as they are supposed to be. The other source of harm to the clerical profession is endowments.-----

聖職者という職業は、二つの原因によって辛いものである。一つは、他のいくつかの職業と共通のものであり、他はこの職業に固有のものである。この職業に固有の原因とは、聖職者は他の人々より有徳であるという一般の人々の思い込みである。普通に任意に選ばれた人は、取り立てて他の人より徳において優れるなどといわれている場合、きっと標準以下に沈みがちである。このことは、「偉大な人々」と呼ばれた王子やその他の人々に関して、昔はよくあることであった。しかし、そのことは、紛れもなく、一般の人々と比較してみても考えられているほどに優れてなどいない聖職者についても同様に真実である。聖職者の職業についても同様に真実である。聖職者の職業にとって辛いもう一つの原因は、寄進財であって.....（嶋本訳）